

取材＝中山み登り

## 勉強と育児に集中するために選んだ 「子連れ留学」という選択

万 浪 る り さん

「なにか始めたい」けれど  
「どうしたらいいかわからない」「気持ちの踏ん切りがつかない」  
そんな30代の女性たちの声をよく耳にします。  
今回取材した「子連れ留学」は、  
ある意味、今の状況から抜け出す「第一歩」の  
新しい形なのかもしれません。

誠実な話し方、上品な笑顔。職業によるイメージがあると思えば、万浪るりさんは元スチュワーデスらしい印象の女性だ。

大手航空会社の国際線客室乗務員として勤務していた彼女は、24歳で結婚。2年後に退職して家庭に入り、28歳のときに長男をもうけた。

公園デビューにママ友達とのランチ。出産後は絵に描いたような育児ライフを送っていた。ところが、長男が1歳のころ、るりさんが決断したのは「子連れ留学」への道——。なぜ、彼女は子供を連れてまで、あえて留学しようと考えたのだろうか。

「本当は子供を産む前に、『自分はいつでもこれを始められる』という『一生もの』の仕事を見つけたつもりでした。客室乗務員を辞めたのもそのためで、退職後は通訳ガイドの資格と英検1級の合格を目指し猛勉強していました。でも、どちらも超難関の試験なので、簡単には受からない。結局資格取得をあきらめる形で子育てに入りました。やり残した『宿題』を抱えたまま家庭に入ったからでしょうか。育児を楽しみながらも、このまま母親だけで終わってしまう焦りが日増しに強まってきました。そのころから、何か専門分野を磨き、将来の社会復帰に備えたいと、駆り立てられるように留学へと気持ちが傾いていったんです」

しかし、子連れ留学をするにしても、オムツも取れない赤ちゃん連れでは、ママの負担が大きすぎる。彼女が「今」にこだわった理由を知りたいところだ。

「育児が一段落するのを待って留学したのでは、その分、社会復帰の時期が遅れてしまう。年齢を

重ねた分、不利にもなる。子供の手が離れたタイミングで仕事を再開するには、育児と同時進行で勉強する必要があります。日本での復学も考えましたが、子供に手がかかる時期なので、それでは中途半端に終わりがかねない。勉強と育児だけに集中するためには、やはり留学が一番だと。それに、子供にとっても物心がつく前なら、英語や海外の文化を自然に吸収できる。そういう意味でも2人にとって『今』がベストだと考えました」

留学の意思を固めた彼女は、夫を始め、夫の両親や実家の両親にも相談を持ちかけた。

彼女の決断は、家族にとっては、最愛の息子や孫と何年も離れ離れになることを意味する。その点を十分に考慮して、時間をかけて自分の気持ちを家族に伝えたという。

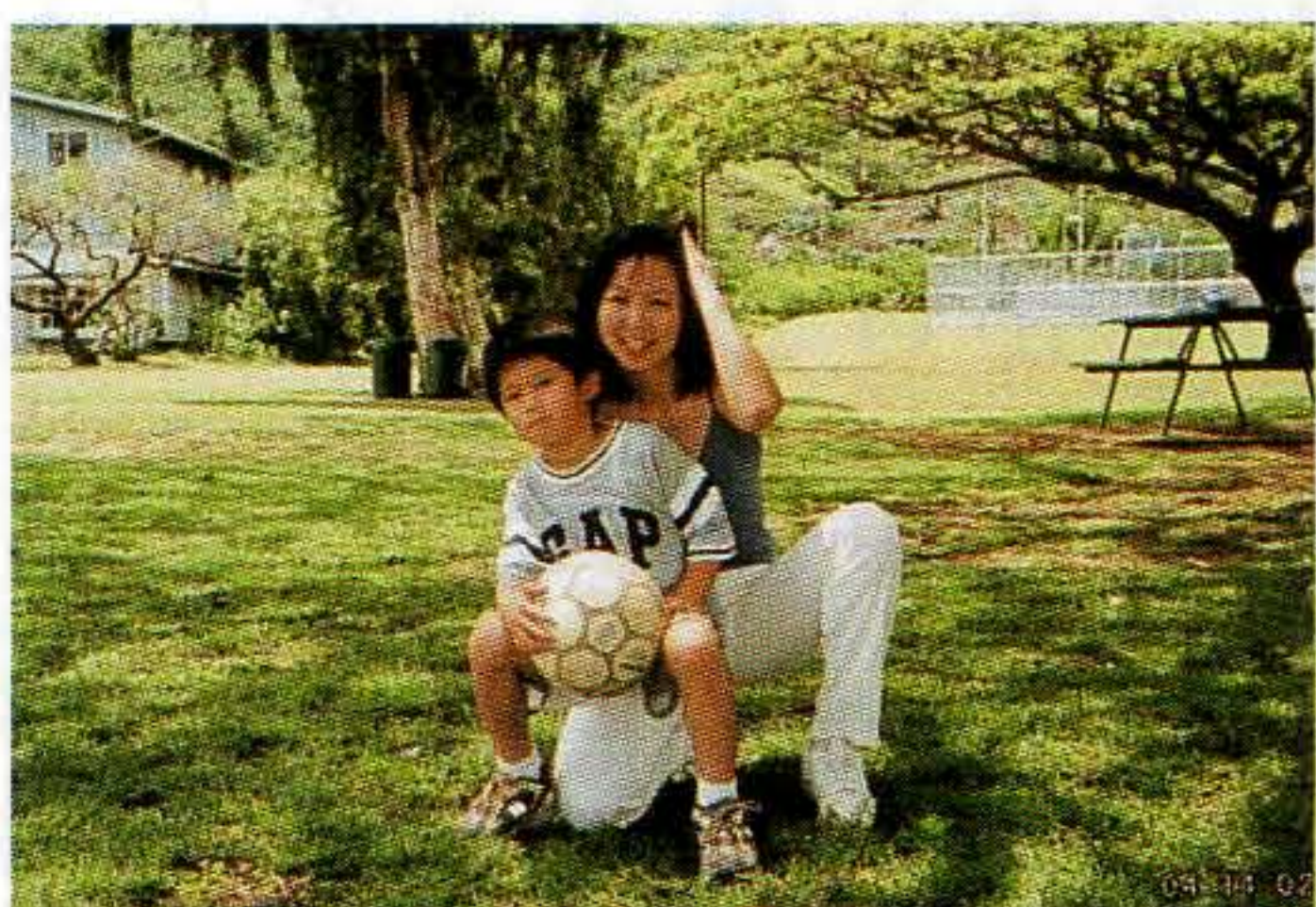
「主人は、もともと妻には家庭にいてほしいタイプなので、本音は反対だったと思います。でも『行ってこいよ』と賛成してくれました。世代的に反対されても当然の両親や義父母も『必ず無事で帰ってきなさい』と送り出してくれて。主人や親たちの優しさに胸が痛みましたが、今は甘えさせてもらおうと思いました。いい成績を残し、息子と



「私の卒業は息子と一緒に成し遂げたもの」と大学卒業記念に親子で撮った一枚。お子さんと二人三脚で子連れのハンデを乗り切った。



子育ての日々は充実していたが、一方で「このまま母親だけで終わってしまう不安」が、ベビーカーを押しながら留学情報を集めるようになった。



勉強に追われながらも、授業時間以外は子供を預けないことを「私のルール」に決め、親子の時間を大切に。勉強時間は睡眠時間を削って捻出した。



ご主人とは24歳のときに大恋愛の末、結婚。退職後は多忙なご主人の帰りを待ちながら、資格取得のため日々勉強に明け暮れていた。



客室乗務員は憧れの職業だったが、入社3年目から仕事内容に疑問を感じ始め、「一生ものの仕事」を探そうと考えるようになった。

まんなみるりさん ● 20歳東京女子短期大学卒業。航空会社に客室乗務員として入社。24歳商社マンの夫と結婚。26歳退職、資格取得のため猛勉強。28歳長男を出産。30歳ハワイ大学に子連れで留学。35歳大学卒業。帰国。36歳教育コンサルティング・アリス・インスティテュートにてウェブ関係の仕事を皮切りに、現在は親子留学コーディネータとして活躍中。

元気に帰国する。それが私にできる恩返しだと信じて」

こうして、るりさんは留学に向け本格的に動き出した。入学先は、治安の良さ、大学構内に託児施設があること、そして自分の貯金と夫の仕送りでの留学生活を賄うため学費の安さを考慮して、州立ハワイ大学に決めた。専攻は航空会社勤務時代の経験を生かし、旅行学を選定。短大時代の取得単位が認定され、大学2年生から編入する形を取った。以降、煩雑な手続きをすべて終え、彼女がハワイへと向かったのは30歳の夏のこと。1歳11カ月の長男をベビーカーに乗せての旅立ちだった。「留学生活は事前に十分な下見をしていたので、順調に滑り出しました。ホノルルのマキキという町に1ベッドルームのアパートを借り、大学まではバスで通学。大学構内のチルドレンセンターに子供を預け授業に出る。それが日課でした」

もともと、小さな子供を連れての留学である。不測の事態はつきものだった。「子供の風邪で授業を休むことになったり、息子が腕を骨折して授業中に呼び出されたり……。骨折のときは大泣きする息子を抱え、病院までのタクシーを探し右往左往。しかも、この夜から、親子そろって高熱を出し寝込んでしまい、深夜に頼る先もわからず途方に暮れました」

異国でのアクシデントは何倍にもこたえるものだ。が、彼女はひるむどころか、ピンチを迎えるたびに、それを教訓にして必需品と痛感した車を中古で購入したり、24時間体制の医療センターを調べ上げたり。一つ一つ問題を解決することで、乗り越えていったという。

ところが、留学から1年、2年と過ぎ、すっかり生活にも慣れたころ、簡単には解決できない問題が持ち上がってしまったのだ。

「滞在期間が長くなれば、親しい友人と家族ぐるみで付き合うようになります。そこには当然、パパも参加してくるので、物心がついた息子が『なぜ、ボクには、パパがいないの?』と言い始めて、

男の子は父親を必要としますから、よその子供がパパと楽しく遊ぶ姿を淋しそうに眺めている息子を見るたびに、心が痛みました」

中古の車は購入できても、パパは現地調達などできない。そこで彼女は、このころから父親不在の穴を埋めるべく、授業時間以外は子供を預けないうことを「私のルール」に決めた。

当時、彼女は将来的に生かせる技術を習得するために、専攻を旅行学からコンピュータサイエンスに変えていた。途中で専攻を変更すれば、負担も増える。が、どんなに試験やレポートに追われなくても、子供との時間だけは死守し、睡眠時間を削って机に向かった。「私の選択に付き合わせた息子が淋しい思いはさせない。そして、日本で待つ主人のために、いい成績を残す」。それが自分との約束だったからだ。

いつしか、子連れの留学のハンデは原動力に変わった。彼女は精神的に「学生」と「母親」を両立させ、やがて全学科を優秀な成績でクリア。途中で、夫のケガで長期間、日本に戻ったものの、5年後の夏、無事に卒業を果たし、6歳に育った長男とともに帰国の途についた。

あれから1年半が経過した現在、親子の「留学効果」はどんな形で出ているのだろう。

「息子は英語と日本語のスイッチを頭の中に持っている、ごく自然に使い分けています。サッカー好きなので『ベッカムの英語の発音はちょっと違うね』と感想を言ってみたり。それに、海外生活が長かったため、物怖じしない、たくましい子に育ってくれた。それが何よりの成果です」

一方、るりさん自身も、帰国後に仕事を再開。コンピュータ技術を生かし、教育コンサルティング会社のウェブ制作・管理を担当するほか、昨年からは親子留学コーディネータとしても活躍の場を広げている。そう、彼女は留学によって、「一生ものの仕事を見つける」という宿題に、見事に答えを出しているのだ。

しかし、るりさんが子連れ留学で得たものは、

## 経験者が口を揃えた

### 「子連れ留学」最大の難関は

#### 「夫の説得」

「夫の単身赴任」は夫婦別居の理由になっても、「妻の勉強」は、夫を一人にする理由にならないのだろう。今回の万浪さんは比較的スムーズに夫が了解したが、かつて取材した子連れ留学経験者たちは、「夫の説得が大変だった」と口を揃えた。「なんて今さら」「子供はどうする?」「オレはどうなる?」。子連れ留学を切り出した妻に、夫は慌てふためき訴える。だが、ここで妻たちは、感情的に反撃もせず、かつ、あきらめもせず。「毎晩深夜まで勉強して夫に『本気』をアピールした」「今の生活に不満はないと夫のプライドをくすぐりつつ、将来のために行きたいと言いつつ」と、実に根気よく夫を洗脳……いや説得。数カ月後に「言ってくるよ」の一言を引き出しているのだ。この屈強なる、彼女たちのバイタリティは、どこから来ているのか。そもそも、子連れ留学する女性は、乳幼児や小学校低学年の子供を持つ身。時間にも追われているし、何より子育てという人生の糧があるから、本来は新しい目標に移りしにくいもの。が、裏を返せば、忙しく充実している時期に「それでも、やりたい」と割り込んでくる目標は、紛れもなく「本物」で、だからこそ彼女たちは夫を粘り強く説得できたように思うのだ。子供が1歳のときに留学を決断した万浪さんにいたっては、怒濤の育児を一人異国でやっても勉強したいほど意欲が「沸騰」していたわけで、その「熱さ」が、夫に「反対」の二文字を飲み込ませたのかもしれない。■とは言っても、子連れ留学にハードなものは、万浪さんは子供のケガや病気を始め、父親役もカバーしなければならなかったし、他の経験者たちからも、「ホームステイ先で奥さんが二人いる」状態になり、食事のメニューや洗濯の回数で「嫁姑」のようにぶつかった。「子供の安全のため、中古車を購入しようとしたら、日本人女性だから甘く見られ高値を吹っかけられた」「小学2年の娘が英語になじめず、『帰りたい』と毎晩泣き叫んだ」など、子連れゆえの苦労話が数多く語られた。だが、彼女たちは、ピンチと向



近所の世田谷公園は留学前に公園デビューした思い出の場所。当時1歳だったお子さんは、この春から小学3年生のバイリンガルだ。

仕事を再開させたとき、ご主人がプレゼントしてくれたバーバリーの手帳。仕事用のアイテムを贈られたことで夫の応援を肌で実感。うれしかった。



なかやま みどり エッセイスト・ルポライター。'63年東京生まれ。大妻女子短期大学卒業後、日産ミスフェアレディ、OL、フリーアナウンサーを経て30代から執筆活動を開始。以降、結婚、恋愛、仕事、育児などをテーマに現代女性の生き方を積極的に取材。等身大のルポルタージュ・エッセイが多くの女性の支持を得ている。39歳で女兒を出産。子育てに奮闘するシングルマザーでもある。著書に『へなちょこシングルマザー日記』（PHP文庫）ほか多数。

second-chance@kobunsha.com

編集部では、「新・二度目の自分探し」専用のメールアドレスsecond-chance@kobunsha.comで、みなさまのご意見をお待ちしております。「取り上げてほしい企画」「記事への感想」なんでも結構です。いただいたご意見は、いろいろな形で誌面に反映させていきたいと思っています。



最近の子連れ留学体験記の執筆など仕事の幅を広げている万浪さん。親子留学ツアーの最新情報はE-mommy.net(www.e-mommy.net)まで。

それだけだったのだろうか。今の仕事に就くまでの経緯を聞くと、見えてくることがある。

「留学時代にインターンシップ（学生として企業内で見習いをする）を経験していたので、帰国後の仕事探しも簡単だと思っていました。ところが、コンピュータ技術者としての経験が浅いため現実が厳しくて。そのとき、技術者として私が特別でないなら、何で特別なのかと見直して、『子連れ留学を経験した技術者』を武器に、再び精力的に仕事探しを始めました」

現在、所属する会社のウェブアドミニストレータに応募するとき、彼女はこの点を強くアピール。採用後は会社と信頼関係を築き、次なる一手とし

て、親子留学部門の開設を会社側に打診。その結果、プロデュースを任せられることになったのだ。

仕事探しに苦戦しても、へこむどころか戦略を練り直し、次に進むたくましさ。これこそがピンチを乗り越え、子連れ留学を成し遂げた彼女が手にした大きな収穫だろう。

「主人は働くことについて何も言いませんが、仕事を始めた私に手帳を贈ってくれました。以前は『専業主婦でいいじゃない』と言っていた主人が仕事用の品を選んでくれた。自分の生き方を認められたようで嬉しかったですね」

「ママの留学」は、彼女や長男だけでなく、夫婦にとっても大きな分岐点となったようだ。

き合うたびに、「居心地の悪いホームステイ先を出るため、言葉も不自由な状態でアパートを探し、生活拠点を確保した」「ひるむことなく『ディスプレイント!』を繰り返して、予算内で中古車を買った」「娘に外国人の友達を作るべく、毎週末、地元の子供サークル活動に参加して、とけこませた」と、異国の地で体当たりをして留学生活を軌道に乗せているのだ。睡眠時間を削り勉強時間にあてた万浪さんも含め、彼女たちに共通しているのは、「日本で待つ夫」や「自分に付き合させた子供」の存在が、成し遂げるためのエネルギーになっていることだろう。

■30代で子連れ留学を終えた女性たちは、10代、20代の学生やOL留学に比べ、学びの成果を確実に次の仕事へとつなげていた。それは彼女たちにとって留学が、「本物の目標」だったことに加え、子連れのハンデがあったからこそ、それを乗り越えたことで、自分に「本物の自信」が持てたからだと思う。

■30代は自分にとっての「専門」を見つけ、育てる時期と言うが、その一環として子連れ留学という選択も十分にありではないか。何十年にも及ぶ結婚生活の中で、妻が自分を磨き、自信をつけるための数年間は、夫の単身赴任と並ぶ夫婦別居の理由になる。万浪さん夫婦のように、夫が妻の生き方を認めるきっかけにもなりうると思うのだ。

■それにしても、妻子がいなくなった家て一人留守番する夫は、どんな心境なのだろう。万浪さんのご主人は、ゴルフのスコアを20も上げたとか。いつか機会があったら、「妻に留学された夫」の自分探しも取材してみたい。(中山み登り)